



中央左 筆者：森川 慶子 中央右 伊藤 和子

収集に携わりご苦勞された方と今回慰霊訪問が二度目の方が居られて戦争当時の状況を数多く把握されていることに感心しました。私達の父に対する思いの浅さに申し訳なきが募りました。

成田空港から一路首都マニラに乗り継いでセブ島へ、この島でも大勢の戦没者が居られたと、フィリピン在住の日本人「関さん」という現地添乗員の説明に激戦地であったことを知りました。セブ島から高速船で二時間三十分要してレイテ島へ、上陸してオルモックの海岸でお二人の追悼慰霊祭を地元住民が見守る中厳かに行ないました。

を感じる地点で三人の追悼で「里の秋」を精一杯歌い、霊の安らかにとの思いでカンキポットを後にしました。

私達姉妹はビリヤバの慰霊碑に着く前に父の配属された六十八師団が全滅し、軍隊の認識証が多数見つかった場所に立ち、しばし言葉を失いました。草生い茂り、今はこの場所で激しい戦いがあったと思われぬように陽は照り、風は和ぎおだやかな生活があり、私達はただ安らかに眠ってくださいと願うしかありませんでした。暑いフィリピンでの行軍戦いは難儀なことであつたらうと想像され、今の平和な幸せの礎となつてくださった多くの方々が居られたからこそ、との思いを一段と深めた今回の訪問でした。

私達はご縁に恵まれて慰霊訪問団の一員として父の慰霊を心から存分にさせていただいたことに対し、遺族会の皆様方に感謝で一杯でございます。

西部ニューギニア慰霊友好親善訪問団 (B班)

平成二十五年二月一日〜十日
福山市駅家町中島六六一―五

松葉 博光

この度「西部ニューギニア慰霊友好親善訪問団」に参加出来まし

たのは、遺族会の皆様の御配慮の御蔭で、無地巡拝して帰って来る事が出来ました。厚くお礼上げます。

二月一日靖国会館にて、結団式を行い、事務局長の挨拶の中で、観光気分ではなく、

一、慰霊Ⅱ個人と第二次大戦で亡くなられた戦没者を慰霊して巡拝する事

二、友好親善Ⅱ我々の戦没者の慰霊だけを現地の人達に迷惑を掛ける、そのお返しのために親善訪問する事

その他の話の中で、この様な慰霊があると言う事を、なんらかの方法で知ってもらい、是非参加してもらいたいとの挨拶があつた。

我々B班、九日間掛けて、ハルマヘラ島のカオ地区・アンボン島・ソロン地区・ビアク島の慰霊でした。各島々での個人慰霊祭の、追悼のことばで、七十年弱の月日の経過で、父との再会と、積年の思い、年長者は、父との出征時の思い出、生まれて間もなかった人は、年老いた自分の姿を、目を凝らして見て下さい。と追悼文の中で読み上げられていました。参加者皆々嗚咽をもらし感涙にむせびます。

ソロン地区では、小学校の親善訪問です。児童達の民族踊りで、賑やか迎えてくれました。我々の微少ではあるが、衣類、文房具、運動用具を進呈して、友好を広め

ました。この学校に、外国人が来ると言う事が、初めてなので校長先生は、ドギマギされていた。その反面児童達は、大喜びで飛び跳ねていました。

ハルマヘラ島では、病院を訪問して、車椅子を進呈しました。此処の病院は、車椅子が以前から無くて、欲しがっていたそうです。我々の持参した車椅子が、第一号で希望が叶えられて、大変喜んでおられました。

最後は、ビアク島に於いて第二次世界大戦慰霊碑の前にて、全戦没者追悼式を式次第により、執り行なわれました。此処でも総括団長の追悼の辞で、私達も貰い泣きです。

飛び立つ日本は、真冬でしたが現地インドネシアは、何処に居ても真夏日です。温度差のギャップで到着から、殆んど団員が、体調の異変に襲われ、食事は香辛料の効いた食材、昼間の灼熱に対し、ホテル・飛行機の中は、ガンガン冷房が効いています。就寝中はエアコンを切る様に忠告していた、添乗員が鼻をズルズル鳴らしてました。

最後の慰霊地、ビアク島へ往復するのに、島嶼間の移動手段は、飛行機で十回の搭乗でした。早朝暗闇の中の出発に疲労困憊の連続です。最後の式典を終え、我々の務めは果たせました。

成田空港で、入国審査後簡単な解団式で、全員の無事帰国出来た事で、目的を達成出来たと喜んでおられ、此れからも元気で暮らして下さいとの事、この十日間兄弟、姉妹の様にしてきた、団員も此処で全国に散らばって、帰郷されました。



西部ニューギニア慰霊友好親善訪問団（A班）

「平成二十五年二月一日～十日」
広島市南区東雲三丁目九番六号

北野 誠眞

この度の西部ニューギニア慰霊友好親善訪問に対し、政府、並びに（財）日本遺族会、広島県、広島市、遺族会のご配慮により、亡き父の眠る戦没地にて追悼できましたことに厚くお礼申し上げます。また、出発に際しましては、献花料を頂戴し重ね重ねお礼申し上げます。

さて、この度の西部ニューギニア慰霊友好親善訪問は日本各地から十七名の遺児が参加、平成二十五年二月一日から十日までの十日間で行われました。又、期間中には、インドネシアとの友好親善目的の一環として当地区の病院、小学校などを訪問し、病院には車椅子、小学校には学用品等を贈呈して現地の方々とも友好を深める事

が出来ました。

一日目、午後一時靖国神社に参加者全員が集合、総括団長の松井尚之氏の挨拶の後、諸手続を済ませて昇殿参拝。

二日目、一行はガルーダインドネシア航空で成田空港を出発し、長時間の飛行にもみなさん元気でジャカルタに無地到着。

三日目、A班、B班に分かれ、私達A班の八名は、空路ウジュンパンドン経由でニューギニア島へ。原始林のジャングル地帯を目下に見て、目的地ジャヤプラに到着。

四日目、最初の慰霊祭地「コタバール」にて私が追悼を行った。日本とインドネシア両国の国旗を掲げ祭壇には供物、献花、持参した追悼文を読み上げました。その一部を列記します。平成十八年八月にこの戦没地コタバールで墓参りを致しましたが、早いもので既に六年半が経ちました。今回再訪問団一員として参加決意をしたのはお父さんに報告する事があるからです。昨年八月十日に元氣であった母が眠るように九十三歳で亡くなり、お父さんの元に参りました。これからは一緒に過ごして下さい。お父さんの遺書には「死んで行く私は何のこだわりもないが息子を立派に育ててくれ、生活に困って再婚するならやむを得ない。」などと記されていますが、母は、再婚もせず一生懸命働き生計を立て親

一人子一人、あの苦難の厳しい時代を乗り越え私を最高学部まで進ませてくれました。

私の子ども四人も結婚をして既に孫も八人おり、今年は寂しい正月でしたが、全員我家に集まって新年を迎えました。その時の写真と母の写真を持って来ましたのでゆつくりと見て下さい。

最後に、多くの尊い犠牲者のもと日本は平和で豊かな国になりました。二度と悲惨な戦争は起こさないように恒久平和を祈っております。お父さんお浄土より我々家族を見守って下さい。と読み上げたが、積年の思いに涙、涙でした。他の方々も順次焼香し全員で「ふるさと」を献歌、目頭を押えて英霊に黙祷を捧げました。

次に「セントアニ」地区に於いて茨城県の方の追悼を同じ要領で行いました。

五日目、早朝より特別機にて「サルミ」へ、この地では福井、大阪、兵庫、出身の三名の方々がそれぞれ追悼文を読み上げました。

六日目、本日も早朝より一行はビアク島に移動し、「水源地」・「コリム」地区にて福井、京都の方の追悼を今まで同様に行いました。

七日目、午前中、激戦地を物語る兵器類、大砲、ドラム缶、鉄兜、機関銃などが野ざらしで展示されている残骸を見て無惨さを痛切に感じた。そのすぐ近くには日本の

司令部が置かれていた洞窟などを見学し、午後からはB班と合流し、第二次世界大戦慰霊碑にて両国の国旗を掲げ参加者全員で国歌斉唱した後、献花、焼香、しめやかに全戦没者の追悼式が行われ今回の目的が果たされました。

八日目、空路、ビアクよりウジュンパンドン経由でデンパサールに移動。

九日目、デンパサール市内のイスラム教寺院などを視察した後、真夜中にガルーダインドネシア航空でデンパサールの空港を離陸し一路成田空港へと向かった。

十日目、成田空港には午前八時五十分無事到着。入国税関手続を済ませ、到着ロビーにて解団式を行い皆さんとお別れをした。

最後に日本遺族会及び県、市の遺族会の今後の益々のご発展をお祈りいたします。本当に有難うございました。

フィリピン慰霊友好親善訪問団（D班）

「平成二十五年三月六日～」

尾道市御調町今田一六九―四
大木 幹彦

私たち全国より集まった参加者は、初日の夜、壮行会を催して頂きました。父の戦没地方面周辺毎